

ブラジル短期派遣を終えて

国際医療科学類 3 年 岡崎実那子

「持続的な社会の安全・安心に貢献するトランスパシフィック協働人材育成プログラム」に国際医療科学類から 2 名が参加しました。およそ 2 週間のブラジル短期研修を行った岡崎さんから体験記をいただきました。

〈本文〉

主な目的は、サンパウロ大学の研究室で専門的な知識と技術を学ぶことでした。私は、現在筑波大学で所属している研究室と同じ分野の研究室で受け入れていただくことができたため、今後の研究に役立つものを持ち帰れるように、研修に取り組みました。お世話になった研究室では、低酸素負荷によって引き起こされる呼吸循環系の変化のメカニズムの解明を研究テーマに挙げていました。今回の研修では、毎日異なるメンバーに付いて、様々な実験手法を見せていただいたり、研究内容を説明していただいたりしました。専門的な研究内容を英語でディスカッションする機会は今までほとんどなかったので、大きなチャレンジでした。しかし、丁寧に説明していただいたおかげで、多くの知識と考え方を学び、新しい技術を得ることができました。

また、日本以外の研究室を学部生のうちに見て、さらに研究者としてのキャリアについて話す機会が持てたことは、今後の進路選択において為になる、貴重な経験でした。ブラジルでは、日本よりも女性の研究者が多くみられた印象でした。これは、州立大学の授業料無料や研究室から生活費のサポートなどの制度の違いや、研究者という仕事に対する考え方が異なるからなのかもしれません。今までは、日本のスタンダードしか選択肢にありませんでしたが、様々なキャリアと働き方をみて、さらに選択肢を広げて考えることができるようになりました。



医学研究棟



キャンパス内にある湖

今回は、サンパウロ大学での研修のほかに、サンパウロ市内研修も行いました。そのなかで、日本とブラジルの歴史とその中で築き上げた両国の信頼関係を知りました。ブラジルを訪れる前は、両国の関係についての知識はほとんどありませんでしたが、日本移民資料館やサントクルス病院（日系移民のために建てられた病院）への訪問や日系移民の方のお話を通して、移民の方々がブラジルに移り住んだ当時の苦労と、ブラジル経済発展への貢献を知ることができました。このほか、街でも日系人を見かけたり、ジャパンハウスやリベルダーヂ（東洋人街）など日本と関わりの深いものを見かけたりもして、日本とブラジルのつながりを感じました。

初めてブラジルを訪れて、ブラジルへのイメージが大きく変わりました。ブラジルは、地理的には非常に遠く、英語圏ではないので言葉の壁も大きいですが、日本に対して良い印象を持っている人が多く、日本人にとっては、親しみやすい国であると感じました。

今回の研修を通して、経験したことがないことや見たことがないことに対して持つイメージや印象が現実と大きく異なることを体感しました。新しいことにチャレンジするときは大きなエネルギーが必要ですが、まだ知らないことに関して関心を持って、自分自身で見て体験して学ぶことの大切さを感じました。



サントクルス病院



休日のパウリスタ通り

筑波医療科学 第14巻 第2号	
編集	筑波医療科学 編集委員会 磯辺智範 二宮治彦
発行所	筑波大学 医学群 医療科学類 〒305-8575 茨城県つくば市天王台1-1-1
発行日	2018年9月4日